

はじめに

子どものころの二つの記憶

「岡部君は、無責任だと思います」

小学校三年生か四年生のころ、学級会での、同じクラスの女の子の発言です。当時の顛末は、まるで記憶にありませんが「学級委員としての職責を果たしていない」ということだったのでしよう。

「なんで？」と私。それ以来、責任という言葉が私の行動や考えに少なからず影響を与えてきたような気がしています。

小学校の記憶をもう一つ。

大泉君は大の親友でした。学校から帰ると、いつも二人でリングをかじりながら遊んだものです。

ある日、二人で街を歩いているときのこと、通りの反対側に、不良っぽい二人が歩いていました。すれ違うときお互いの目があつたのでしよう。その二人は、こちら側までやってきて「なんだ！ 眼（ガン）をつけたな！」と、言いがかりをつけてきました。

私は、とつさに「すみません！」と謝りました。ところが、「なんですか？ 眼（ガン）なんてつけてません！」と、大泉君はきっぱり言いました。カッコいい！

三つ目は、昼食の時間です。クラスの女の子の弁当は、食パンの耳でした。

それを見つけた私は「パンの耳の弁当かよ」と思わず言つてしまいました。小さな町ですし、その子の家は貧乏だったこともよくわかつていました。僕の友達の多くは、身体障がい者住宅や母子家庭のアパートの子で、そのころ、その子たちの新聞配達などを手伝つたりしていたくらいです。

なんで、そんなこと言つてしまったんだろう？ 子どもながら自己嫌悪に襲われました。

その後、市内の進学校に進んだ私は、御多分にもれず学生運動の真似事に加わりません。願書を出した医学部の受験会場の前を通つて、パチンコに行ったのは、みんなの大事な卒業式を妨

害したことに對する罪滅ぼし。何とか公務員に潜り込み、急死した先輩の後に天下り（當時は
かろうじて違法ではありませんでした）を志願しました。

その後、いろいろないきさつから辞職したことは、あのと時のカッコ悪い自分からの決別で
す。そして、少しは本を読み、自分のことを考えるようになったのは、パンの耳事件のおかげ
です。

まったくの外れな行動を積み重ね、なにはともあれ、大学在学中に結婚をして、生活のため
のトラック運転手から霞が関に中途採用され、なんだかんだで、何とか円満退職。関連法人を
経て独立、行政書士から中小企業診断士、東洋大学でMBAを取り、今は経営コンサルタント
として暮らしています。

今があるのは、やはり、子どもころの恥ずかしい、情けない、納得できない記憶が僕の人
生の通奏低音となって流れてくれていたおかげです。

経営学という学問は、統計やいろいろな難しい分析で仮説を立て、答えを求めます。

しかし、人は決して統計の「元」ではなく、経営は、まさしく人の営みです。しばしば、非情で不合理に見える事態は、すべて人によって作り出されるといってよいでしょう。

人を人として考えることは、統計学上のデータに還元して考えることに比べ、面倒でまどろっこしいことです。

「黙って仕事しとけよ！」と、鬼の公務員だった私が、独立してやっとながりがわかった子どものころの記憶からはじめる、人にまつわる経営。皆さんの気づきのきっかけになれば幸いです。

岡部コンサルタンツ代表 岡部 眞明